

偏見のない先生方のもと

リベラルな校風を形成

— 成蹊学園で学ばれたのは、中学校からですね。

黒川 小学生のころは体が弱く、結核にもかかっていました。食糧事情が悪く、特效薬もない時代であり、冬は風邪をひきっぱなしで、ほとんど学校を休んでいたような状態でした。

それが、成蹊中学校に入学してから、みるみる元気になっていきました。桜が咲き、櫻の木が繁る自然に恵まれた環境が良かったのでしょうか。ほぼ皆勤に近くなり、昼休みは前庭でソフトボール、冬はラグビーを楽しんでいました。



政策研究大学院大学教授／内閣特別顧問

# 黒川 清

Kiyoshi Kurokawa

UCLA教授、東京大学名誉教授、日本学術会議会長、内閣特別顧問など、国内外の重要な役職を歴任。腎臓内科の国際的なプロフェッショナルとして、また日本を代表する論客として、世界を舞台に活躍されているのが黒川清さん。豊富な国際経験を背景に、今後の成蹊学園の改革に関して、さまざまな提言をいただきました。

成蹊学園の強みは「国際性」にある！

それをさらに拡充して

世界に通用する「プロ」を育ててほしい

— 印象に残っている先生はいらっしゃいますか。

黒川 度量が広く、偏見のない先生ばかりで、リベラルな校風が形成されていました。今振り返ってみると、書家の上條信山先生、俳句の中村草田男先生、百十メートルハードルの選手として著名な高柳茂先生、数学の奥住正彦先生など、錚々たるメンバーだったことに驚きます。子どもですから、有名な先生方に教わっているありがたみを理解していたわけではありませんが……。授業は、そんな先生方がガリ版で作成した教科書で行われていました。

先生と生徒の間も緊密で、正月に友人たちと連れ立って、英語の藤井一美先生のご自宅に集まり、百人一首で遊んだことを覚えています。

— 医師をめざそうと考えられたのは、いつごろからですか。

黒川 先祖が肥後細川藩のご典医で、代々医師の家系の長男として生まれたので、家業を継ぎ、医師になるものだと思

直に考えていました。

私のクラスはけっこう成績が良く、東大にたくさん合格するのではないかと、期待されていました。私も東大医学部をめざすことにしたのですが、途中から、皆そろって、あまり勉強しなくなってしまうました。周囲からおだてられすぎて、実力を過信してしまったわけです(笑)。結局、東大に合格したのは三名だけでした。その分、翌年は、私も含めて浪人してからがんばった生徒が大挙合格したので、東大の合格者数は全国で十一位、私学では麻布に次いで二位に躍進しました。浪人時代の思い出は、夏の高校野球です。成蹊高校が東京都予選の決勝戦まで進み、甲子園への切符をかけて、早実(早稲田実業学校)と対戦することになったのです。めったにないことですから、私も張り切って球場に応援に出かけました。ところが、早実のエースは、一年生だった王貞治さん。大差で負けてしまいました。ちなみに、翌年も一回戦で早実と当たり、再び大敗しました。二年連続で王さんの軍門に下ったわけです。

長期間海外にとどまったのは「東大的」ではなく「成蹊的」!?

— 大学を卒業してから七年目に留学され、その後、UCLA内科教授に就任されるなど、海外でキャリアを積まれたわけですが、どのような思いがあったのでしょうか。

黒川 日本の医師は、卒業した大学の付属病院、関連病院でキャリアアップを図るのが一般的です。たとえ留学しても、二〜三年のリサーチ・フェローをして帰国するのが、暗黙のルールになっていました。それ以上の長期間を、大学の許しもなく独断で過ごす、閉鎖的な医局の「規定路線」からはずれてしまい、帰国後の保証はなくなります。ですから、私も当初は、二〜三年で帰国するつもりでいました。ところが、アメリカで研究の面白さに目覚め、帰国を先延ばししているうちに、医局の「ムラ社会」の掟を破った者と見なされ、戻れる雰囲気ではなくなっていたのです(笑)。

— アメリカと日本では、研究体制に何か違いがあるのですか。

黒川 私にとっては、ペンシルバニア大学のラスムッセン教授との出会いが転機になりました。初対面で教授から言われたことは「あなたは私が指示したことを研究するために留学してきたのではないでしょう。自分が独立した研究者に成長するためにきているのなら、自分の好き

なことをやって、自己実現を果たさない」ということでした。日本のやり方と同じに、先生の指示通りに研究すればいいと軽い気持ちでいたのに、内心これは大変なことになったと思いました。もちろん、そうはいつでも、適当に研究をして、お茶を濁すことも可能でしたが、そこで私には意地、反発精神が芽生えました。「よし、すごい研究をやって、驚かせてやろうじゃないか」と。それから図書館に通い詰めて、定説とは異なる視点、発想のテーマを模索し、二年間、腎臓の細胞機能に関する研究に没頭しました。そのほか、日本の医師免許はアメリカでは通用しませんから、カリフォルニア医師免許をとり、次いで米国内科専門医、米国内科腎臓専門医の資格も取得しました。私にとっては、三十代半ばが最も真剣に勉強した時期ですね。



— そのまま、約十五年間、アメリカで研究生活を過ごされたわけですね。

黒川 出世の階段を順調にのぼっていたいと考えるようなタイプだったら、さっさと帰国してははずです。私には、人を押し退けてでも出世したいという欲はなかったし、枠にはまらない生き方ではないんじゃないかという意識もありました。その感覚は「東大的」ではなく「成蹊的」なものかもしれません(笑)。

アメリカは競争も激しい反面、がんばっている人は、性別も国籍も関係なく正当に評価するフェアなシステムが守られています。それに感動し、日本の保守的な体制を疑問視するようになったのは、成蹊学園で、受験一辺倒ではない、自由な環境で学んだ影響が大きいと思います。先ほど申し上げたように、成蹊学園の先生方は偏見がいつさもなく、リベラルな雰囲気満ちていました。中学・高等学校時代にとくに意識していたわけではありませんが、そういう先生方と一緒にいることで、柔軟な価値観が自然と醸成されていった気がします。

— アメリカで心地よく過ごされていたのに、帰国を決意されたのは、どのような理由からですか。

黒川 UCLAの教授になり、生活も安定し、高台にプール付きの家を建てて、「ハッピーネスとはこんな生活かな」と感じたりしたものです(笑)。ところが、そんな時、東大の先輩教授

が「これからの東大には、あなたのような人が必要だ」と、口説きにきてくださったのです。そこまで言ってくださるのは、やはりありがたいことでした。また、二人の子どもが、バイリンガルではあるものの、日本で暮らした経験がない。自国の文化を知らないことは、日本人としてのアイデンティティを失ってしまうのではないかと、危惧もありました。そこで、一時にしろ帰国を決意したのですが、日本の家は狭くて、子どもたちからは随分不満を聞かされました(笑)。

### セント・ポールズ校などへの交換留学制度の拡充を望む

— 成蹊学園の今後の方向性について、ご意見を聞かせください。

黒川 今後の私学が考えなければならぬのは、強みを伸ばすことです。それも付け焼き刃的なものではなく、建学の精神や歴史的事実に裏打ちされた特色を強化することが肝心です。

では、成蹊学園のバリューとは何なのか。私は建学の基本と国際交流の伝統にそれを見出すべきだと考えています。とくに、アメリカのセント・ポールズ校や、オーストラリアのカウラ高校との交換留学は素晴らしい制度です。その効果が大きいことは、横原稔さん(三菱商事相談役)、有馬龍夫さん(日本国政府代表)、入江昭さん(ハーバード大学名誉教授)など、セント・ポールズ校への留学を経験された方々の



### 黒川 清 (くろかわ・きよし)

東京都生まれ。成蹊中学・高等学校を経て、東京大学医学部卒業、同大学院医学研究科修了(医学博士)。1969年、ペンシルバニア大学に留学。後にカリフォルニア大学ロサンゼルス校(UC L A)に移り、1979年、内科教授に就任。1983年に帰国し、1989年、東京大学医学部第一内科教授、1996年、東海大学医学部長、1997年、東京大学名誉教授、2003年、日本学術会議会長などを歴任。現在、政策研究大学院大学教授、内閣特別顧問(科学、技術、イノベーション担当)を務める。『医を語る』(共著/西村書店)『世界級キャリアのつくり方』(共著/東洋経済新報社)など、著書多数。1999年、紫綬褒章受勲。ホームページ:www.kiyoshikurokawa.com

世界レベルでの活躍ぶりを見れば一目瞭然です。この制度をもっと拡充し、できれば、中学生・高校生の一割は留学でできるようにしてほしい。一方で、海外からの交換留学生も数多く受け入れ、地域社会にホームステイさせていく。外国人と一緒  
に学校生活を送ることは、視野を広げる上で大いに役立ちます。その人脈が、将来、世界を舞台に活躍するために、多大なパワーになることは間違いありません。

—現在、学園創立一〇〇周年記念事業の一環として、国際教育センターが発足するなど、国際交流強化に向けての取り組みがスタートしています。

黒川 それはとても重要なことです。日本はアジアの大国と慢心しているかもしれませんが、近年、アジア圏の国々の経済成長は目ざましく、しかも、リーダー候補の若者は、欧米の高等教育に学び、英語も話し、異文化を吸収しています。対して、日本の英語教育は立ち遅れ、異文化への認識もきわめて希薄です。このままでは世界から取り残されてしまいます。もはやグローバルランゲージはブロークン英語になっているのですから、外国人留学生を数多く受け入れると同時に、一部の授業は英語で行えばいい。それぐらいの迫力のある教育をめざしてほしいですね。そうしたグローバル化を意識した教育を行い、世界に通用する「プロ」を育てていかなければ、日本の未来は暗いと言わざるを得ません。活躍の場が日本

に限定される「鎖国マインド」から脱皮することが重要で、そのためにも、若いうちから海外に飛び出すチャンスを与える、セントポールズ校などとの交換留学制度の拡充を期待しています。

文系、理系の枠を超えた  
リベラルアーツ型学部への転換

—二〇二五年の社会について検討する「イノベーション25戦略会議」の座長を務められ、大学改革についても斬新な提言をされていますね。ご意見をお聞かせください。

黒川 「イノベーション25戦略会議」で、私が強く提唱したのが、大学入試の抜本的改革です。具体的には、入試段階で文系、理系の区分を廃止することを想定しています。この区分があるから、受験勉強効率化のために、高校では低学年から文理のコース分けを行っています。その弊害は計り知れません。入試を一本化し、全学生にリベラルアーツ教育を実施すべきです。そうすることで、哲学や歴史に裏打ちされた深い洞察力や思考力が養えます。将来の基盤となる幅広い基礎知識を修得することによって、多様な価値観を身につけ、自分の可能性を広げ、人生の目標を模索することもできるはずで、その上で、各自が本当に学びたいこと、なりたいたい職業に就くための専門教育を選択する。今後の大学は、そんな教育システムに変貌していく必要があります。

また、教員スタッフの活性化も重要なテーマになります。本物の国際派プロは、組織や肩書、性別、国籍に関係なく、自分の能力によってキャリアアップを図っていきます。「個のウデ」で勝負しているわけです。そのあたりの感覚が、日本は世界規準から大きく遅れています。たとえばパーティーで、自己紹介する際に、日本人は「〇〇銀行の者です」と、会社名を冠する。外国人なら「アトム・アバンカー」と名乗ります。この違いが、日本特有のものだというのを、日本人はもっと認識すべきです。

当然、大学は他の組織以上に「個のウデ」で戦える集団でなければなりません。そのためには、徒弟制度的な男性主体のヒエラルキーから脱却して、もっと女性や外国人を登用してほしい。ちなみに、アメリカのアイビーリーグは、八大学のうち四大学のトップが女性です。それに対して、残念ながら、日本は八十数校の国立大学のうち、女性学長は一大学のみです。私学を含めても女性学長は五%程度に過ぎない。これではダイナミックなイノベーションは望めません。異なる感性を持つ人材が混在することこそが、大学と教育の活性化につながるのです。

繰り返し述べてきたように、成蹊学園の良さは、国際性とリベラルな校風にあります。その強みをより発揮するためにも、積極的に女性や外国人に活躍の場を提供する大学像をめざしてほしいと願っています。

(広報課)